研究ノート

ケニアの舞踊と舞踊のデジタル記録・解析・考察

相原　進[i]，遠藤　保子[ii]，高橋　京子[iii]

本研究の目的は，今日のケニアにおける舞踊の保存・継承の状況および，ケニアの舞踊の特性を明らかにすることである。ケニアの舞踊は，元来，地域共同体の中で伝承されてきた。今日では若者の欧米文化への偏重傾向などにより，伝統的な舞踊や音楽が演じられる機会は減っている。その一方で，国営の文化施設ボーマス・オブ・ケニアに所属する舞踊団や民間の舞踊団によって，舞踊が保存・伝承されている。本研究では，ケニアの舞踊の特性を明らかにするために，ケニア中央部のキクユの舞踊，東南部のゴンダの舞踊，北西部のサンブルの舞踊，東北部のボラナの舞踊の計４種類について，モーションキャプチャを利用してデジタル記録を作成し，記録をもとに肩と腰の速度変化と角度変化を解析した。解析から，各舞踊の動作の特性として，特定の部位の動作を強調する際に他の部位の動作を抑制することが明らかになった。さらに解析をもとに聞き取り調査をおこなうことにより，解析結果を再帰的に検証し，各舞踊における動作特性や望ましいとされる動作について，よりいっそうの把握が可能となった。

キーワード：ケニア，舞踊，モーションキャプチャ，動作特性

目　次

はじめに
Ⅰ　ケニアにおける舞踊の保存・伝承
　Ⅰ・１　国立劇場
　Ⅰ・２　ボーマス・オブ・ケニア
　　Ⅰ・２・１　施設の概要
　　Ⅰ・２・２　演目
　Ⅰ・３　民間の舞踊団
Ⅱ　舞踊動作の収録と解析
　Ⅱ・１　舞踊動作の収録
　Ⅱ・２　被験者
　Ⅱ・３　演目
　Ⅱ・４　解析
Ⅲ　解析に関する聞き取り調査と考察
　Ⅲ・１　男性の舞踊
　　Ⅲ・１・１　キクユ
　　Ⅲ・１・２　ゴンダ
　　Ⅲ・１・３　サンブル
　　Ⅲ・１・４　ボラナ
　Ⅲ・２　女性の舞踊
　　Ⅲ・２・１　キクユ
　　Ⅲ・２・２　ゴンダ
　　Ⅲ・２・３　サンブル
　　Ⅲ・２・４　ボラナ
　Ⅲ・３　全体の傾向
おわりに

はじめに

ケニア共和国（以下，ケニア）は，東アフリカに位置する共和制国家である[1)]。ケニアにおいて，舞踊と音楽はコミュニティでの儀式や宗教など，生活のさまざまな場面において重要な位置を占めている。

ⅰ　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻博士課程
ⅱ　立命館大学産業社会学部教授
ⅲ　フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科准教授

元来，舞踊は地域共同体の中で伝承されてきた（遠藤 2008）。しかし今日のケニアはアフリカ有数の経済発展を遂げており，国民の生活が変化する中で，伝統的な舞踊と音楽のあり方も変化しつつある。たとえば若者の欧米文化への偏重傾向などによって伝統的な舞踊や音楽が演じられる機会は減っているが，その一方で国営の文化施設ボーマス・オブ・ケニア Bomas of Kenya 所属の舞踊団や民間の舞踊団により，舞踊が保存・伝承されている[2)]。

本研究の目的は２つある。第１の目的は，今日のケニアにおける舞踊の保存と伝承の状況について，人類学的フィールドワークをもとに明らかにすることである。第２の目的は，ケニアの舞踊の特性について，モーションキャプチャを用いて舞踊を記録・数値化して検証することである。これらの目的のためにケニアにおいて人類学的なフィールドワークを実施し，さらにモーションキャプチャを用いて舞踊のデジタル記録を作成・解析して，それをもとにケニア人舞踊家への聞き取り調査をおこなった。

これまで筆者はアフリカ各地（ガーナ，ナイジェリア，タンザニア，ケニア，エチオピア）にて人類学的フィールドワークを実施し，世界に先駆けてアフリカの舞踊を対象としてモーションキャプチャを用いてデジタル記録を作成・解析し，多面的考察をもとに研究成果を公表してきた（遠藤他 2014）。本研究は，筆者が継続的におこなってきた研究の中に位置づけられるものである。本研究で扱うデータは，ケニアにおける人類学的フィールドワーク（相原：2014年２月，遠藤：2001年４月～2002年３月，2005年８月，2007年８月，高橋：2003年８月）の成果および，2006年８月にケニアのギリヤマ舞踊団 Giriama Dance Troupe を日本へ招聘し，モーションキャプチャにより作成した舞踊のデジタル記録である[3)]。

本研究の意義は，第１に，人類における舞踊の全体像を理解できることである。アフリカにおいて，舞踊は情報伝達手段として発達したといわれている。寒川（1991: 79）が「これまでのスポーツ研究は，有文字民族のスポーツだけを対象にしていたが，時代をさかのぼればさかのぼるほど，文字を持った地域は少なくなっていく。有文字民族のスポーツだけを扱うのでは，全体を見渡せない状況におかれている」と述べるように，無文字社会の舞踊を知らなければ，舞踊の全体像を理解できない。そのような関心のもと，これまで筆者はアフリカ各地の舞踊を対象として，舞踊の保存と伝承に関する調査やモーションキャプチャを用いた舞踊特性の解析などの研究をおこなってきた。本研究を通じてアフリカの舞踊に関する研究をさらに深化させ，舞踊の全体像をよりいっそう理解することにつなげられる。

第２の意義として，アフリカをルーツとする現代の芸術をより深く理解できることが挙げられる。川田が「黒人アフリカ世界が，音楽やダンスや造形美術の面で『西洋近代』が失っていたものを示し，刺激を与えてきた」（川田 1999: 412）と指摘するように，アフリカの舞踊や美術を知ることは，現代の舞踊や美術を理解することに繋がる。また，塚田（2000）は，アフリカの音楽を知ることで，無自覚のうちに身に着けてしまった西洋音楽にもとづく「音楽についての常識」を解体し，価値観を相対化させることができるとしているが，この点は舞踊についても同様であると言えるだろう。

第３の意義として，今日のケニアはアフリカにおいて先駆的に経済発展を遂げており，舞踊をめぐる状況や社会との関係を明らかにすることは，今後のアフリカにおける伝統文化の行方を知るうえで重要であることが挙げられる。舞踊の保存・伝承について調査し，舞踊のデジタル記録の作成および舞踊特性の解析をおこなうことは，アフリカにおける伝統文化の保存と伝承に資する研究になると考えられる。

Ⅰ　ケニアにおける舞踊の保存・伝承

舞踊の保存・伝承に関わる国営施設として，国立劇場およびボーマス・オブ・ケニアについて述べる。

Ⅰ・1　国立劇場

首都ナイロビ市内に，ナショナル・シアターと名付けられた劇場がある。正式名称は「Kenya Cultural Center incorporating Kenya National Theatre」であり，政府の国家遺産・文化省 Ministry of State for National Heritage and Culture に属するケニア・カルチュラル・センター Kenya Cultural Center を構成する施設のひとつである。この施設は貸し劇場として運営されている（遠藤 2008）[4]。劇場所属の舞踊団は存在しないが，民間の舞踊団が，劇場の裏庭・講義室・地下スペースなどで練習をしている[5]。民間の舞踊団においては個々の舞踊家どうしが公演などの目的に応じてグループを結成しているため，劇場は練習の場であると同時に交流と情報交換の場となっている。そのような事情により，劇場が舞踊の保存・伝承における拠点のひとつとなっている。劇場への舞踊家の出入りは，ディレクターによって厳しく管理されている[6]。

Ⅰ・2　ボーマス・オブ・ケニア

Ⅰ・2・1　施設の概要

ボーマス・オブ・ケニアは，ナイロビ市中心部から南西に約10km に位置する文化施設である。施設が完成したのは1972年２月であり，当初はケニアを訪れる外国人観光客向けの施設として位置づけられていた。今日ではケニア人観光客もこの施設を利用しており，学校の生徒などに伝統文化を教える役割も担っている[7]。

ボーマス・オブ・ケニアの「ボーマス」は，スワヒリ語で住居を意味する「Boma」に由来している。敷地内にはケニアの各時代・各民族の住居の実物展示があり，劇場では伝統的な舞踊と音楽の公演がおこなわれている。劇場所属の舞踊団には国立舞踊団という名称は付けられていないが，施設が政府組織によって管理・運営されているため，この施設の舞踊団が，実質的に国立舞踊団の役割を果たしていると考えられる。ケニアの経済計画の指針である「ケニアビジョン2030」の「観光」の項目ではボーマス・オブ・ケニアを利用した観光開発について書かれており，そのための取り組みとして「アミューズメントパークの開発」と「５つ星ホテルの設置」が挙げられている。しかし「ケニアビジョン2030」の「教育」の項目では科学技術が重視されており，舞踊と音楽の教育やボーマス・オブ・ケニアの役割については書かれていない。

Ⅰ・2・2　演目

ボーマス・オブ・ケニア所属の舞踊団については，遠藤（2008）に詳しく述べられている。遠藤は2002年に実施した調査をもとに，団員の構成や団員の１日のスケジュールについて紹介しており，その中で舞踊団の演目についても触れている。演目について「ケニアのさまざまなエスニック・グループを網羅する」という施設側の理念を紹介したうえで，実態としてエスニック・グループに偏りがあるという問題点を指摘している。

この点について2002年と2014年のプログラムを比較すると，大幅に改善されていることがわかる（図１）[8]。演目数では2002年には全体で27演目であったのが，2014年には47演目に増加している。地域ごとの演目数と取り上げている民族数も増加しており，2002年には１演目のみであったウェスタン Western 州は４演目となり，2002年には演目が存在しなかった少数民族は４演目に増加している[9]。

個々の演目名に着目すると，たとえば2002年には民族名である「キクユ Kikuyu」をそのまま演目名としていたが，2014年では「キクユの割礼儀式 The Agikuyu circumcision ceremony」というように演目名が詳細になっている。2014年には個々の民族の舞踊以外の演目も含まれており，たとえば「ミレニアムダンス Millennium dance」という演目は，ケニアの歴史や国民の団結を題材とした寸劇舞踊である。教育にかかわるものとして「カリブニ・ケニヤ Karibuni Kenya」という演目では，1982年に作られたポップス「ジャンボ・ブワナ Jambo Bwana」をさまざまな伝統楽器で演奏することによって楽器を紹介することを目的としている。これらのように，ボ

	2002年		2014年	
州名	演目数	民族数	演目数	民族数
Central	2	1	4	1
Coastal	8	5	12	7
Eastern	3	3	5	3
North Eastern	1	1	1	1
Nyanza	2	1	5	3（1地域を含む）
Rift Valley	4	4	5	5
Western	1	1	5	4
少数民族	0	0	4	4
その他	1（不明5）	0	6	0
計	27	16	47	28

図１　2002年と2014年の演目数の比較

ーマス・オブ・ケニアでは演目の偏りが解消されつつあることや，歴史や楽器の紹介など教育的色彩の強い演目が追加されていることがわかる。「ケニアビジョン2030」ではボーマス・オブ・ケニアの役割として観光のみが記述されているが，現場で運用されているプログラムにおいては，この施設の本来の目的である教育にも配慮が及んでいると考えられる。

Ⅰ・3　民間の舞踊団

今日のケニアでは民間の舞踊団によって舞踊が演じられることがある。たとえばナイロビ市内のホテルやレストランにおいては観光客向けに舞踊が演じられており，このような舞踊団の実態については遠藤（2004）において詳しく述べられている。舞踊家たちは，結婚式などの依頼に応じて舞踊団を結成する。舞踊家たちは個別に活動をおこなっており，伝統的な舞踊や音楽以外に，西洋音楽などさまざまなジャンルのグループにも所属している[10)]。公演などの目的に応じて舞踊団が結成されるため，メンバーの構成は流動的である。

民間の舞踊団は国立劇場にて不定期におこなわれるイベントや公演にも関わっており，そのためのプロモーション映像の撮影などにも携わっている。また，民間の舞踊や音楽のイベントにも出演することがある。今日のケニアでは伝統的な舞踊（Traditional Dance）よりも「カルチュラル・ダンス Cultural Dance」という語が使われており，このような舞踊が演じられる「カルチュラル・イベント」にて舞踊を披露している[11)]。

Ⅱ　舞踊動作の収録と解析

本研究では，モーションキャプチャによって収録した記録をもとに舞踊動作の解析をおこなう。記録の収録にあたっては，2006年10月に来日したギリヤマ舞踊団のリーダー，ジュリアス・チャロ・シュトゥに対し聞き取り調査をおこない，地域や民族がかたよらないように考慮して代表的な４つの舞踊演目を選んでもらったうえで，各演目における典型的な動作２つを選んでもらうことにより収録演目を選定した。

Ⅱ・1　舞踊動作の収録

2006年10月，立命館大学衣笠キャンパスのアート・リサーチセンターにおいて，モーションキャプチャを用いて舞踊動作を収録した。収録では，専用のスーツに32個のマーカーを取り付け，マーカーの軌跡を12台のカメラを用いて追跡し，モーションアナリシス社のソフト「EVarT 4.2」を用いて記録と編集をおこなった。

Ⅱ・2　被験者

被験者は2006年10月にギリヤマ舞踊団（Giriyama Dance Troupe）のメンバーとして招聘した舞踊家４名であり，その内訳は男性２名（男性A，男性B），女性２名（女性C，女性D）である[12)]。先述したようにケニアの民間の舞踊団には公演などの目的に応じて個々の舞踊家が集められるという特徴がある。被験者となった４人も，そのような方針のもとでプロの舞踊家として個別に活動をおこなっている。

Ⅱ・3　演目

収録した演目はキクユ２種，ゴンダ２種，サンブル２種，ボラナ２種であり，概要は以下のとおりである。

Ⅱ・3・1　キクユ

中央部，旧セントラル Central 州のキクユの人々に伝わる舞踊で，男性の割礼儀式で踊られる[13)]。

Ⅱ・3・2　ゴンダ

南東部，旧コースタル Coastal 州のギリヤマの人々に伝わる舞踊である。沿岸部のためアラビアからの影響を受けており，腰を使った舞踊動作に特徴がある。この舞踊は結婚式や誕生日などのめでたい機会に，人々の娯楽と子孫繁栄の祈願のために踊られる。

Ⅱ・3・3　サンブル

北西部，旧リフトバレー Rift Valley 州の北部に伝わる舞踊である。戦争に出陣する戦士を激励したり，戦争が終わって勝利を祝ったりする際に踊られる。

Ⅱ・3・4　ボラナ

ケニア北東部，旧ノースイースタン North Eastern 州のマルサビット，モヤレに住むボラナの人々の舞踊であり，結婚式で踊られる。ボラナの人々は家畜を飼って生活しており，そのことが舞踊の動作にも反映され，牛などの動きを模倣した舞踊動作がみられる。

Ⅱ・4　解析

これまで筆者らは，ローマックスの考えをもとに，ナイジェリアやガーナの舞踊動作について，肩と腰の動きに着目してモーションキャプチャ記録の解析をおこなってきた（Lomax 1969，遠藤他 2014，相原他 2016）。それらを踏まえ，本研究における舞踊動作の解析では２つの点に着目する。１点目は，舞踊家が身体，とくに胴体をどのように動かしているかである。２点目は，各舞踊家の表現方法の違いである。それらを明らかにするため，各舞踊家の肩と腰の動きについて，各部位の速度変化と角度変化に着目して解析をおこなった。

$$\theta^{s}=\tan^{-1}\frac{LS_y-RS_y}{\sqrt{(LS_x-RS_x)^2+(LS_z-RS_z)^2}}$$

LS：左肩マーカー　RS：右肩マーカー
xyz は各マーカーの三次元座標

数式１　正面から見た型の角度変化の計算式

$$\theta^{w}=\tan^{-1}\frac{LA_y-RA_y}{\sqrt{(LA_x-RA_x)^2+(LA_z-RA_z)^2}}$$

LA：左腰マーカー　RA：右腰マーカー
xyz は各マーカーの三次元座標

数式２　正面から見た腰の角度変化の計算式

肩と腰の速度変化については，左右の肩，左右の腰に取り付けた計４個のマーカーの軌跡をもとに，マーカーの移動距離を時間で除算することで秒速を算出した。角度については，正面から見た肩の角度変化（数式１）と腰の角度変化（数式２）を算出した。

以下の表１，表２は，５演目における各被験者の舞踊動作の解析結果についての男女別一覧表である。一覧表のもとになったデータは文末資料に掲載している。

Ⅲ　解析に関する聞き取り調査と考察

2014年２月20日，国立劇場にて，舞踊動作のデジ

表１　男性Ａ，男性Ｂの解析結果

	男性Ａ	男性Ｂ
キクユ-a	肩と腰の両方が，緩やかに小さく動く。	肩と腰の両方が緩やかに小さく動く。腰の動きは肩よりも抑制されている。
キクユ-b	肩が速く，大きく動く一方，腰の動きは速度，角度ともに抑制され，肩の動きが強調されている。	肩が速く，大きく動く一方，腰の動きは速度，角度ともに抑制され，肩の動きが強調されている。
ゴンダ-a	肩が速く，大きく動く一方，腰の動きは速度，角度ともに抑制され，肩の動きが強調されている。	腰よりも肩が大きく動く。腰は小刻みに動いている。
ゴンダ-b	肩と腰の両方が動く。肩よりも腰の方がやや大きく動く傾向がある。	肩と腰の両方が動く。肩と腰の動きの大きさは同じ程度であり，腰が小刻みに一定の間隔で動く。
サンブル-a	肩と腰の両方が，緩やかに，小さく動く。	肩と腰の両方が，緩やかに，小さく動く。
サンブル-b	肩と腰の両方が動く。動きは小さいが，素早く動く。	肩と腰の両方が動く。動きは小さいが，素早く動く。
ボラナ-a	肩が大きく動く一方，腰の動きは抑制されている。	肩の動きが大きく，腰の動きが抑制されている。肩と腰が同じ程度の速さで動く。
ボラナ-b	肩と腰が，緩やかに，小さく動く。	肩と腰が，緩やかに，小さく動く。肩と腰を同時に速く動かす動作がある。

表２　女性Ｃ，女性Ｄの解析結果

	女性Ｃ	女性Ｄ
キクユ-a	肩と腰の両方が，緩やかに，小さく動いている。	肩と腰の両方が，緩やかに，小さく動いている。
キクユ-b	肩が大きく動く一方，腰の動きは抑制され，肩の動きが強調されている。	肩が大きく動く一方，腰の動きは抑制され，肩の動きが強調されている。
ゴンダ-a	肩と腰が緩やかに大きく動く。腰の動きが肩より大きい。	肩と腰が緩やかに大きく動く。肩の動きが腰より大きい。
ゴンダ-b	肩と腰が緩やかに動く。腰の動きが肩より大きい。	肩と腰が緩やかに動く。肩よりも腰の動きが速い。
サンブル-a	肩と腰が，緩やかに，小さく動く。	肩と腰が，緩やかに，小さく動く。
サンブル-b	肩が緩やかに大きく動く一方，腰の動きは速度，角度ともに抑制され，肩の動きが強調されている。	肩が緩やかに大きく動く一方，腰の動きは速度，角度ともに抑制され，肩の動きが強調されている。
ボラナ-a	腰が大きく動く一方，肩の動きは抑制され，腰の動きが強調されている。	腰が大きく動く一方，肩の動きはやや抑制されている。
ボラナ-b	肩と腰が，緩やかに，小さく動く。	肩と腰が，緩やかに，小さく動く。腰の動きの方が肩よりも大きい。

タル記録（三次元映像）や解析をもとに聞き取り調査をおこなうことによって，解析の再帰的検証を試みた。調査対象者は，プロの舞踊家の対象者Ｏ（男性）と対象者Ｊ（女性）である。両名とも2003年および2006年の来日公演に舞踊家として参加しており，2014年時点においてもナイロビ市内にて舞踊家として活動を続けている。調査は以下の手順でおこなっている。各演目について男性，女性それぞれの舞踊動作のデジタル記録を見せる。次に，デジタル記録を見ながら舞踊動作における特性と重要な点について質疑応答をおこない，最後に，各舞踊の特性と重要な点を踏まえて舞踊動作の解析について質問した。

Ⅲ・1　男性の舞踊

Ⅲ・1・1　キクユ

キクユ-aについて，対象者O，Jによると，重要なのは頭，腕，脚の動きであり，男性Bはこれらの動きが力強いので，優れているとした。解析では男性Aの肩と腰が同様に動いているのに対し，男性Bの肩が大きく動く一方，腰の動きは抑制されている。男性Bは頭・腕の動きができているため，これらの部位に近い肩にも同様の傾向が現れたと考えられる。

つぎにキクユ-bについて，重要なのは頭，肩，膝，脚の動きであり，男性A，男性Bともにこれらの部位を動かせているので優劣はないとした。解析では男性A，男性Bともに肩が大きく動く一方で腰の動きが抑制されており，対象者による評価を裏付けられる。

Ⅲ・1・2　ゴンダ

ゴンダ-aについて，重要なのは肩と脚の動きであり，男性Aと男性Bとでは脚を使う表現において違いがあるが，これは個々の表現の差であって優劣に差はないとした。解析では男性A，男性Bともに肩が大きく動く一方で腰の動きが抑制されており，対象者による評価を裏付けられる。

つぎにゴンダ-bについて，重要なのは肩，腕，脚の動きであり，男性Bはフットワークが良く，頭と脚が同じように動いているので優れているとした。解析では男性Aは肩よりも腰がやや大きく動いているが，男性Bは肩，腰ともに同じように動いている。男性Bは頭と脚を同じように動かせていることにより肩と腰の動きにも同様の傾向が現れたと考えられ，対象者による評価を裏付けられる。

Ⅲ・1・3　サンブル

サンブル-aについて，重要なのは頭，首，腰，脚の動きであり，男性A，男性Bともにほぼ同じ動きだが，男性Aの方が若干ではあるが力強い動きができているので優れているとした。解析では男性Aの方が肩，腰ともに男性Bよりも速く動いており，これらの点から対象者による評価を裏付けられる。

つぎにサンブル-bについて，重要なのは肩と脚の動きであり，男性Aの方が力強い表現ができているので優れているとした。腕の使い方はそれぞれ別のバージョンを演じており，この点は表現の差にすぎないとした。解析では男性Aの肩の動きが男性Bよりも速く，この点から対象者による評価を裏付けられる。

Ⅲ・1・4　ボラナ

ボラナ-aについて，重要なのは頭，腕，脚の動きを中心に全身を使うことであり，男性A，男性Bともにほぼ同じ動きだが，男性Aの方が若干ではあるが力強い動きができているので優れているとした。解析では男性Aの肩の動きが男性Bよりも速く，この点から対象者の評価を裏付けられる。

ボラナ-bについて，重要なのは頭，腕，腰，脚の動きを中心に全身を使うことであり，男性Bの方が頭，脚，腕のコーディネートができているので優れているとした。解析では男性A，男性Bともに肩・腰の速度変化と角度変化に規則性があることはわかるが，コーディネートの優劣の判断までには至らなかった。

Ⅲ・2　女性の舞踊

Ⅲ・2・1　キクユ

キクユ-aについて，対象者O，Jは，重要なのは頭，尻，脚の動きであり，女性C，女性Dともにこれらの動きができているので優劣はないとしている。解析では女性C，女性Dともに肩と腰が緩やかに小さく動いており，両者に目立った差がないことから，対象者による評価を裏付けられる。

キクユ-bについて，重要なのは頭，腕，膝の動きであり，女性C，女性Dともにこれらの動きができているので優劣はないとしている。解析では女性C，女性Dともに肩が大きく動いている一方，腰の動きは抑制されており，頭と腕の動きが肩の動きに影響していると考えられる。

Ⅲ・2・2　ゴンダ

ゴンダ-aについて，重要なのは頭，腕，腰，脚の動きで，女性は腰を使う点において男性との差があ

り，女性Ｃ，女性Ｄともにこれらの動きができているので優劣はないとしている。また，女性Ｄは腕を使い，女性Ｃは使っていないが，この点は表現の差にすぎず，両者に優劣はないとした。解析でも女性Ｃ，女性Ｄともに肩よりも腰が大きく動いており，この舞踊の特徴を裏付けられる。

ゴンダ-b について，重要なのは肩，腰，尻，脚の動きと体を震わせる動きであり，女性Ｃ，女性Ｄともにほぼ同じようにこれらの動きはできているが，女性Ｄの方が力強いとした。解析では女性Ｄの腰の速度が女性Ｃよりも速く，そのことが対象者による評価に繋がったと考えられる。

Ⅲ・２・３　サンブル

サンブル-a について，重要なのは頭，首，腕，脚，腰の動きであるとしている。女性Ｄはステップに合わせて体を深く沈めているが，女性Ｃはステップができていても深さがないため，女性Ｄの方が優れているとした。解析では女性Ｃの肩と腰の角度変化にばらつきがあるのに比べ，女性Ｄは肩と腰の角度変化が同調しており，ステップの深さが肩と腰の角度変化のちがいとして現れたと考えられる。

サンブル-b について，重要なのは肩，腕，腰を中心とした全身の動きであり，女性Ｃ，女性Ｄに優劣はないとしている。解析でも女性Ｃ，女性Ｄともに肩の角度変化が大きいという特徴があり，対象者が挙げた舞踊動作の特徴とも一致している。

Ⅲ・２・４　ボラナ

ボラナ-a について，重要なのは全身を使うことであり，その中でもとくに腕，脚，腰を使うとしている。女性Ｃと女性Ｄに優劣はなく，女性Ｄは頭を使っているが，これは表現の違いにすぎないとした。解析では女性Ｃ，女性Ｄともに腰の角度変化が大きいという特徴があり，対象者が挙げた舞踊動作の特徴とも一致する。

ボラナ-b について，重要なのは片腕，片脚を動かす一方，地につけた側の脚は動かさないことであるとしている。女性Ｄは女性Ｃに比べ，脚を上げる側はきっちり上げ，もう一方の地に着ける側はしっかり着いているので良いとした。解析では女性Ｄにおいて，腰の角度変化が肩よりも明確に出ているという特徴があるものの，脚をしっかり地に着けているか否かを判断するまでには至らなかった。

Ⅲ・３　全体の傾向

聞き取り調査の対象者Ｏ，Ｊは，男女の舞踊いずれについても力強い動きを評価している。解析ではキクユ，サンブル，ボラナにおいて，男女ともに肩を強調するときは腰の動きを抑制し，腰の動きを強調するときは肩の動きを抑制するという傾向が見られる。このような強調と抑制の関係について，対象者Ｏは，ケニアの舞踊において，男性は肩をとくに強調し，女性は腰をとくに強調することが多いと述べている。また，女性の舞踊においては胸や腰の動きを強調したり，全身をすべて用いて表現したりすることがあると述べており，解析からもこれらの特徴を見て取ることができる。

おわりに

本研究では，人類学的調査とモーションキャプチャを用いた解析を通じて，ケニアにおける舞踊の保存と伝承の状況と，舞踊動作の特性および舞踊表現について明らかにした。

舞踊動作の解析と聞き取り調査から，ケニアの舞踊動作の特徴として，肩の動きを強調する場合は腰を抑制するといったような，強調と抑制の関係がある可能性が見出された。さらに男女間の舞踊動作のちがいとして，とくに女性において胸や腰を強調する動きや全身を使う表現があることがわかった。これらの特徴は，筆者がこれまでガーナ，ナイジェリア，タンザニアにおいておこなってきた調査研究においても同様の傾向が見受けられる。今後の展開として，西アフリカ，東アフリカでの舞踊の動作特性を比較し，類似点と相違点を明らかにしていきたい。そして調査研究を進めることで，各地域の歴史，身体観，生業形態，宗教などと舞踊動作との関連につ

いて考察を進めたい。

これまで筆者らは舞踊学習や国際理解のためのデジタル教材の開発にも取り組んでおり，本研究の成果をもとに，ケニアの舞踊を題材とした，異文化理解や開発教育のための教材開発を進めたい。そして教材を用いた実践授業をアフリカと日本双方にておこない，舞踊への関心を持ってもらうことによって，新たな文化伝承者の発掘に繋げるとともに，アフリカと日本の双方における異文化理解の促進にも寄与することができると考えている。

なお，本研究にかかわって2008年度～2012年度日本学術振興会基盤研究Ｂ「モーションキャプチャを利用したアフリカの舞踊に関する総合的研究」（研究代表者：遠藤保子），2014年度立命館産業社会学会共同研究助成「アフリカ舞踊と社会を対象にしたグローバル教育の教材開発に関する研究」（研究代表者：遠藤保子，共同研究者：相原進，高橋京子）から研究助成金をいただきました。心より御礼申し上げます。

注

1）　ケニアの面積は58.3万平方キロメートル（日本の約1.5倍），人口は2016年の時点で約4,725万人（世界銀行），首都はナイロビである。主要な民族はキクユ，ルヒヤ，カレンジン，ルオなどであり，公用語はスワヒリ語と英語である。ケニアは1963年に英国から独立し，1964年に共和制に移行，初代大統領としてジョモ・ケニヤッタが就任した。2013年にはウフル・ケニヤッタが大統領に就任し，2017年10月の選挙でウフルが再選している。ケニアはアフリカでも有数の経済発展を遂げており，成長戦略の指針として「ケニアビジョン2030 Kenya Vision 2030」を定め，５カ年ごとに計画を見直しながら経済政策が進められている。

2）　Ⅰ章３節で詳しく述べるが，ケニアでは舞踊家が伝統的な舞踊のみをおこなうのではなく，クラブでのイベントなどでヒップホップなどの西洋の舞踊や音楽を演じることもある。

3）　ギリヤマ舞踊団は，来日公演として2003年10月12～19日に「2003年度国際交流基金助成ケニア民族舞踊団日本公演事業・ギリヤマダンストゥループジャパンツアー2003」を宮城学院女子大学などにて実施，2006年８月には「アイフォニック地球音楽シリーズ119・ケニアの律動ギリヤマ舞踊団」を伊丹アイフォニックホールにて実施している。本稿筆者のひとりである高橋は，2003年の公演では舞台監督，2006年の公演では舞台監督補佐を務めている。

4）　筆者のひとり（相原）が調査をおこなった2014年２月には，３カ月先まで伝統的な舞踊そのものを扱った公演予定はなく，各種イベントに関わる形で伝統的な舞踊も上演されているという状況であった。

5）　ガーナ，ナイジェリア，エチオピアの国立劇場では，劇場所属の舞踊団が舞踊の保存，伝承，上演，小学生を対象とした教育活動などの事業をおこなっている（遠藤他 2014）。しかしケニアの国立劇場では，それらのような事業はおこなわれていない。

6）　国立劇場の敷地内で練習をおこなう場合，国立劇場のディレクター兼 CEO の許可が必要であり，調査の場合も同様の許可が必要となる。

7）　ボーマス・オブ・ケニアはナイロビ国立公園や大型ショッピングモールに隣接しており，ナイロビ中心部のホテルなどからボーマス・オブ・ケニア行きのバスが運行されている。2014年２月時点での入場料は「ケニア市民」（大人200シリング，子供50シリング，団体の社会見学），「ケニア市民以外」（大人800シリング，子供400シリング，提携校の生徒50シリング，東アフリカの大学生100シリング）であり，この施設の目的である，観光と教育に即した値段設定となっている。

8）　ケニアでは2013年に行政区画が変更されているが，本稿では遠藤（2008）の2002年の演目との比較のために，旧行政区画をもちいている。

9）　North Eastern 州の演目数が少ない理由として，この州の住民は牧畜などのために移動生活をすることが多く，実態を把握しにくいという事情があると考えられる。

10）　ケニアにおける伝統的な音楽，西洋音楽，テクノロジーとの関係については石川（2012）に詳しい。

11）　本稿筆者のひとりである相原がタンザニアにておこなった調査（相原 2016）においても同様の結果が得られている。

12）　ギリヤマ舞踊団は2003年にジュリアス・チャロ・シュトゥが中心となって結成された。ケニアでは舞踊家は個別に活動しており，目的に応じて舞踊家や演奏家たちが集まる際に，プロデューサーが重要な役割を果たすことがある。シュトゥは舞踊家，演奏家であると同時にプロデューサーでもある。このような舞踊家とプロデューサーとの関係は，ガーナなどでも見ることができる（遠藤他編 2014）。2014年時点では，シュトゥはノルウェーにて活動を継続している。

13）　ケニアでは2013年に行政区画の変更があったが，演目の選定にかかわる聞き取り調査をおこなったのが2006年であるため，旧行政区画をもちいて表記している。

引用・参考文献

Alan Lomax [1969 “Choreometrics: A Method for the study of Cross-cultural Pattern in Film” Research Film, vol.6 no.6 pp.505-517] Ronald D. Cohen edited 2003 *Alan Lomax Selected writings 1934-1997* Routledge, pp.275-284, New York

Bomas of Kenya（出版年不明；公式パンフレット）*Kenya Traditional Dances* Tourist Maps Africa, Nairobi

相原進・遠藤保子・野田章子（2017）「エチオピアの舞踊特性と舞踊のデジタル記録・解析・考察（下）」立命館大学産業社会学会編『立命館産業社会論集』第52巻第４号 pp.97-115，京都.

相原進・遠藤保子・野田章子（2016）「エチオピアの舞踊特性と舞踊のデジタル記録・解析・考察（上）」立命館大学産業社会学会編『立命館産業社会論集』第52巻第３号 pp.93-113，京都.

相原進（2016）「アフリカにおける舞踊とツーリズム―タンザニアを事例に」日本スポーツ人類学会編『スポーツ人類學研究』18号，pp.11-20.

石川和博（2012）「ケニアンポップスと民族音楽―音楽とともに生きる」松田素二・津田みわ編著『ケニアを知るための55章』明石書店，pp.186-189，東京.

遠藤保子（2007）「ケニアの舞踊―ボーマス・オブ・ケニアを中心として」日本スポーツ人類学会編『スポーツ人類學研究』７・８合併号，pp.43-50，京都.

遠藤保子（2005a）「アフリカの舞踊研究」日本体育学会編『体育学研究』第50号　pp.163-174，東京.

遠藤保子（2005b）「新しいダンス教育のために―ケニアのダンスを通して」大修館書店『体育科教育』53巻 10号，pp.28-29，東京.

遠藤保子（2004）「舞踊と文化」寒川恒夫編『教養としてのスポーツ人類学』大修館書店，pp.75-81，東京.

遠藤保子（2001）『舞踊と社会―アフリカの舞踊を事例として』文理閣，京都.

遠藤保子（1991）「民族と舞踊」片岡康子編『舞踊学講義』大修館書店，pp.22-31，東京.

遠藤保子・八村広三郎・崔雄（2008）「今日のアフリカの社会と舞踊の記録・保存・伝承―ケニアの舞踊とモーションキャプチャ」立命館大学アート・リサーチセンター紀要『アート・リサーチ』８号，pp.15-24，京都.

遠藤保子・相原進・高橋京子編著（2014）『無形文化財の伝承・記録・教育―アフリカの舞踊を事例として』文理閣，京都.

遠藤保子・高野牧子・打越みゆき・細川江利子編著（2011）『舞踊学の現在―芸術・民族・教育からのアプローチ』文理閣，京都.

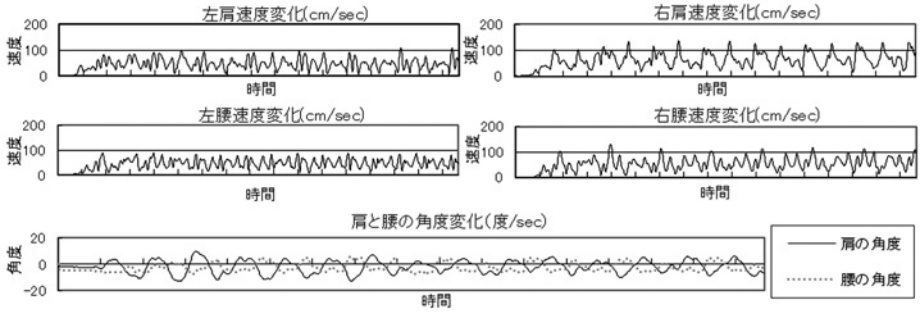
川田順造（1999）『アフリカ入門』新書館，東京.

寒川恒夫（1991）「スポーツ人類学の連載にあたって」『学校体育』４月号，pp.78-80，東京.

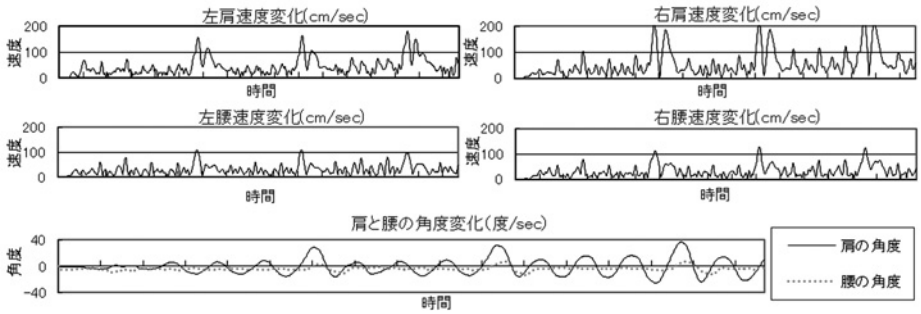
塚田健一（2000）『アフリカの音の世界　音楽学者のおもしろフィールドワーク』新書館，東京.

Kenya Vision　2030　http://www.vision2030.go.ke/ 最終閲覧日2018年１月22日.

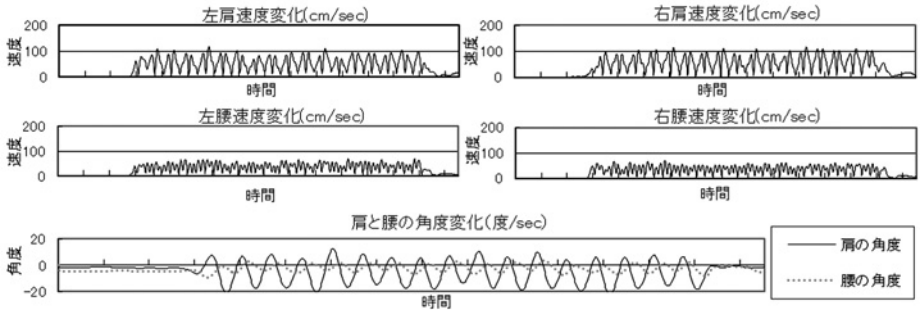
［文末資料］各舞踊家・各演目の解析結果



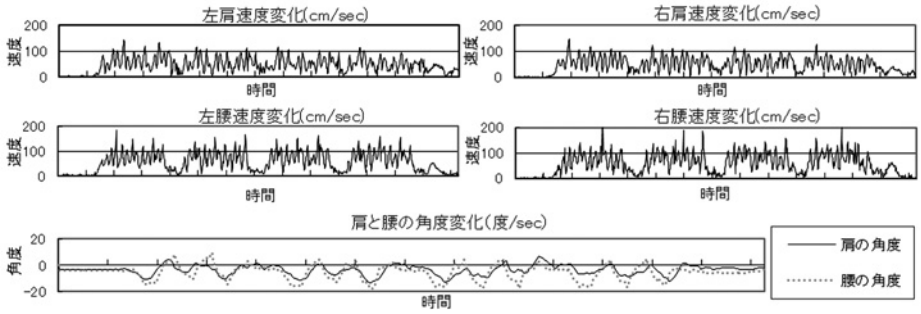
男性 A キクユ-a



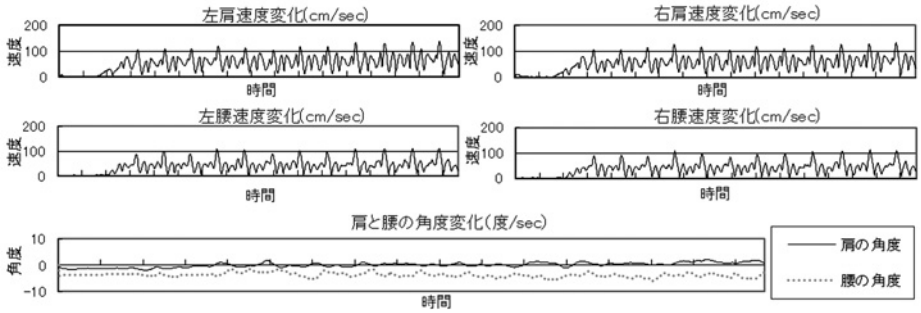
男性 A のキクユ-b



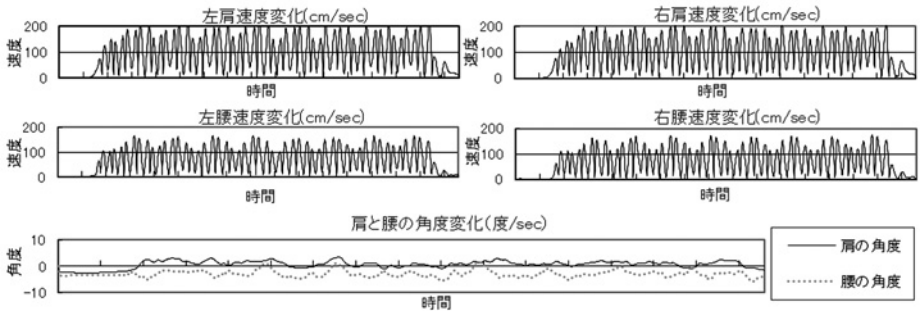
男性 A のゴンダ-a



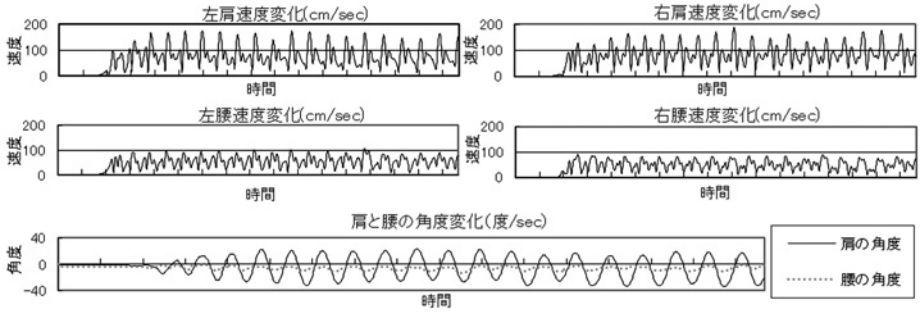
男性 A のゴンダ-b



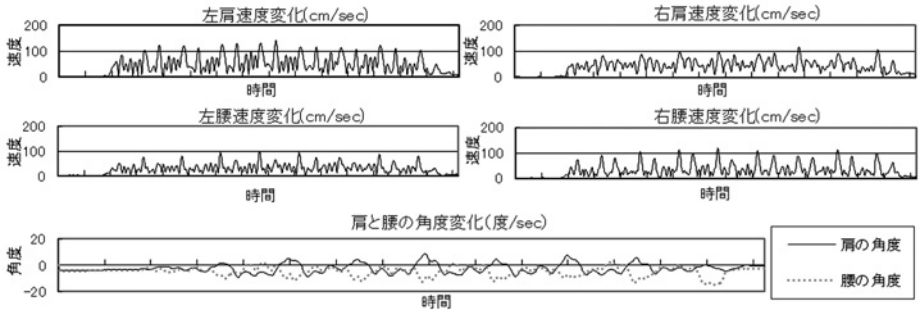
男性Ａのサンブル-a



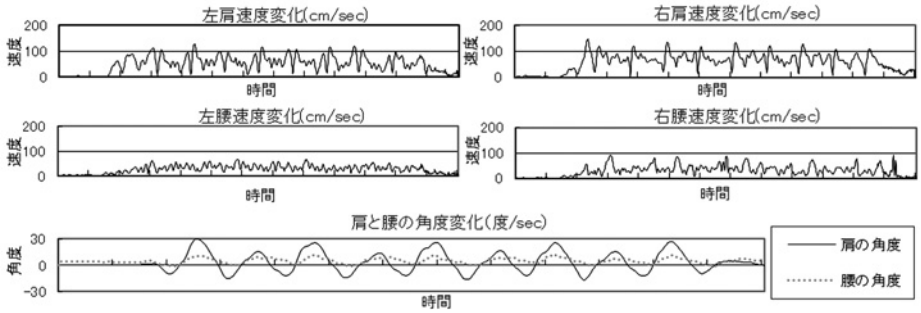
男性Ａのサンブル-b



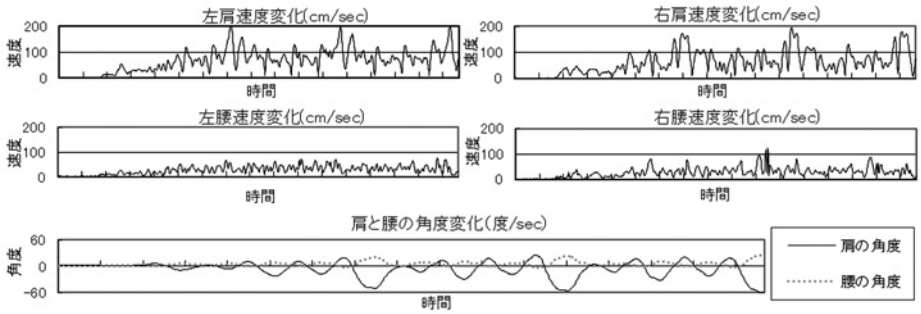
男性Ａのボラナ-a



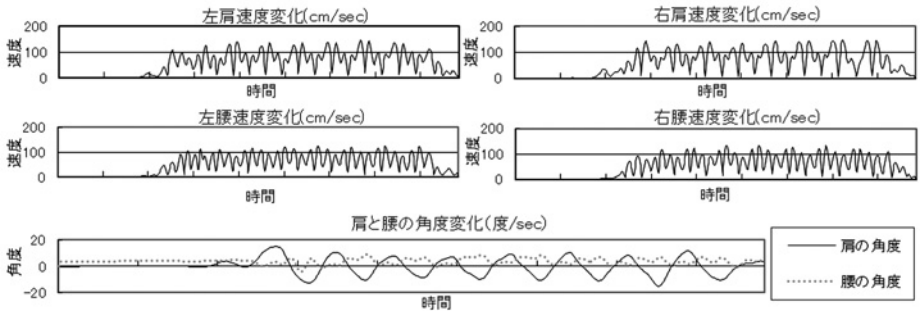
男性Ａのボラナ-b



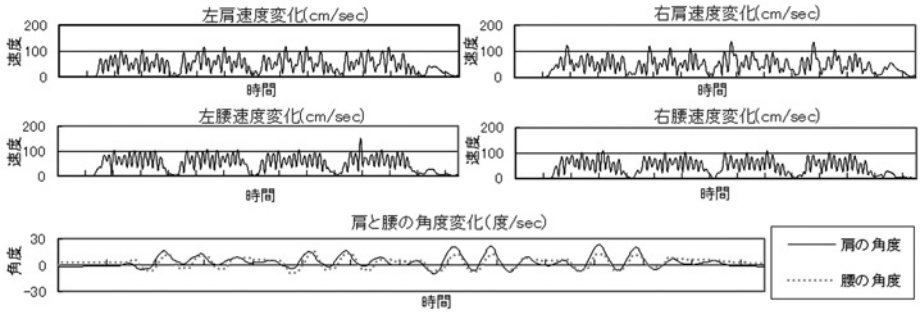
男性Ｂのキクユ-a



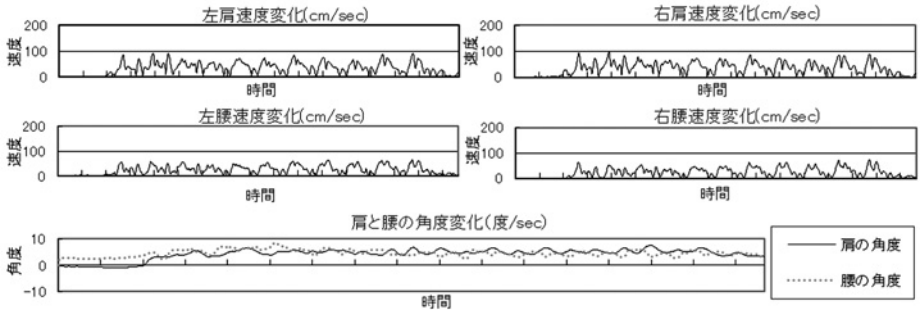
男性Ｂのキクユ-b



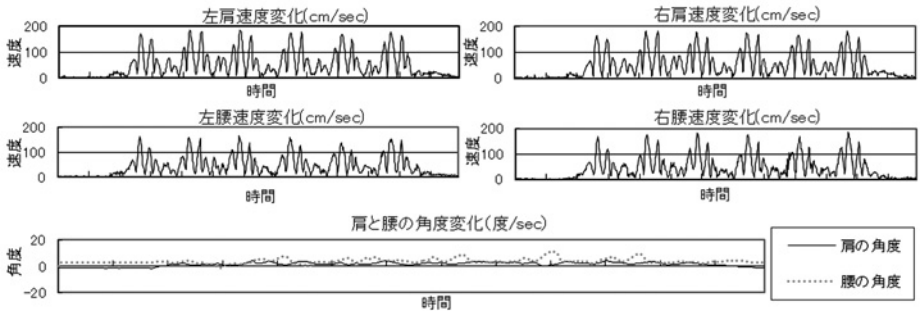
男性Ｂのゴンダ-a



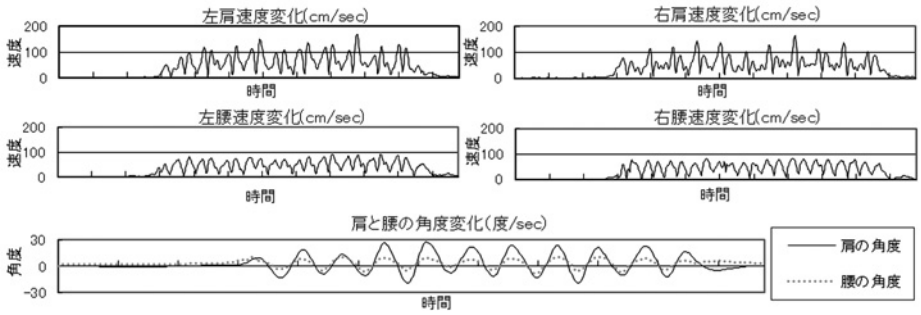
男性Ｂのゴンダ-b



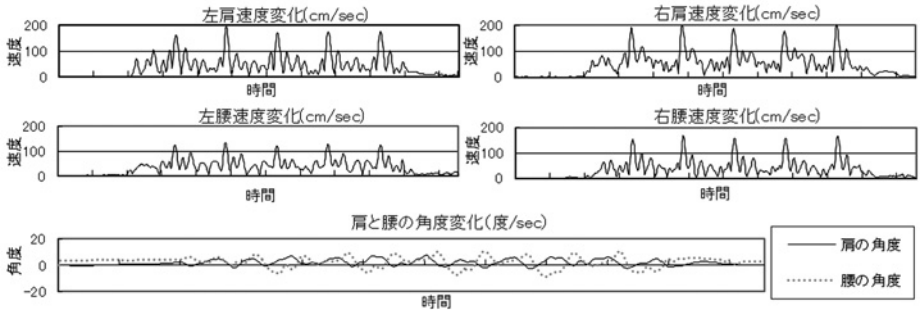
男性Ｂのサンブル-a



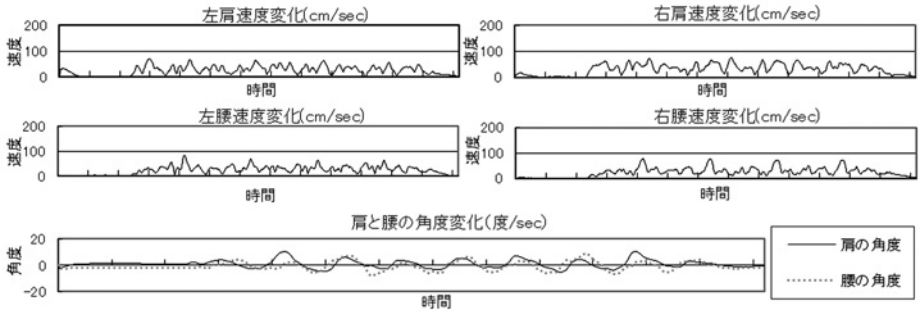
男性Ｂのサンブル-b



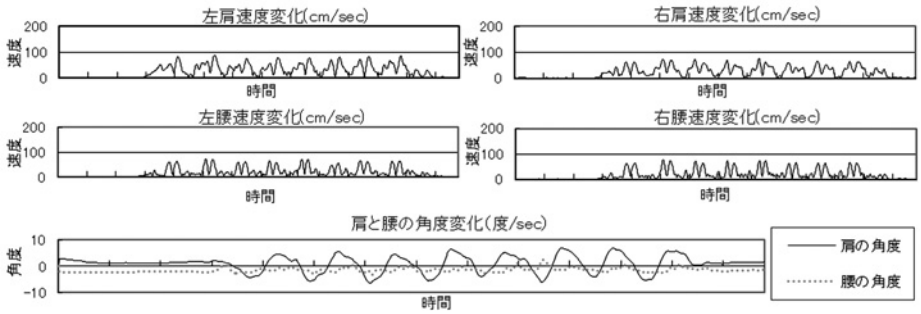
男性Ｂのボラナ-a



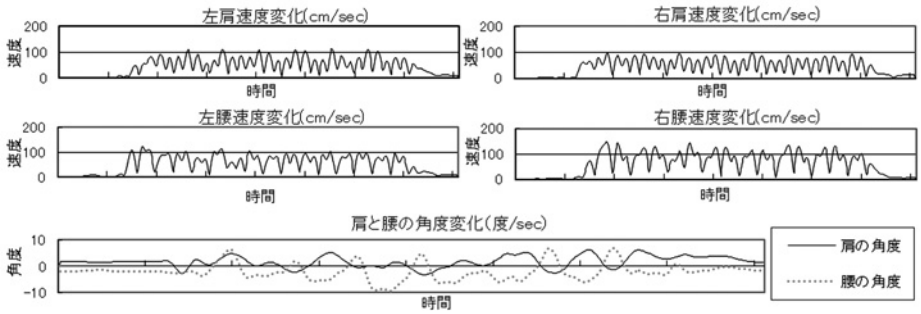
男性Ｂのボラナ-b



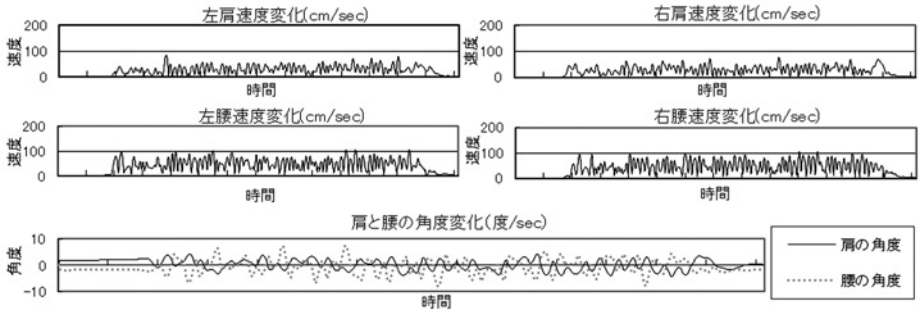
女性 C のキクユ-a



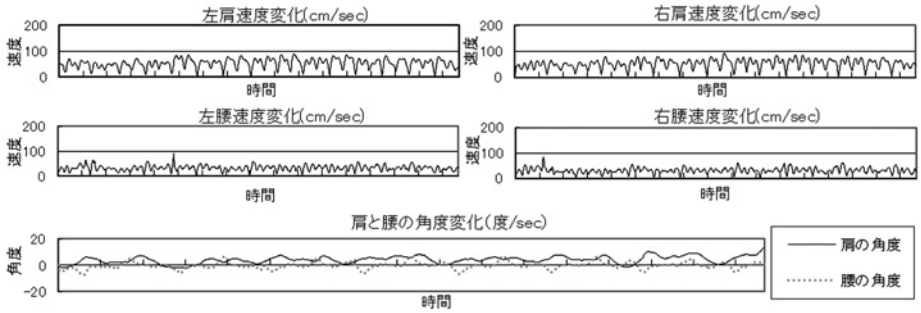
女性 C のキクユ-b



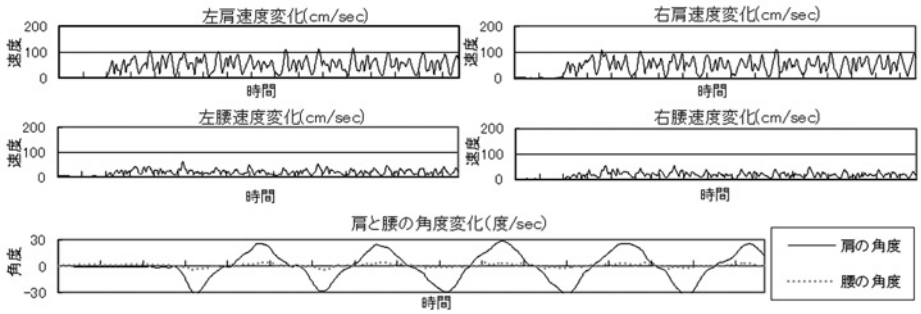
女性 C のゴンダ-a



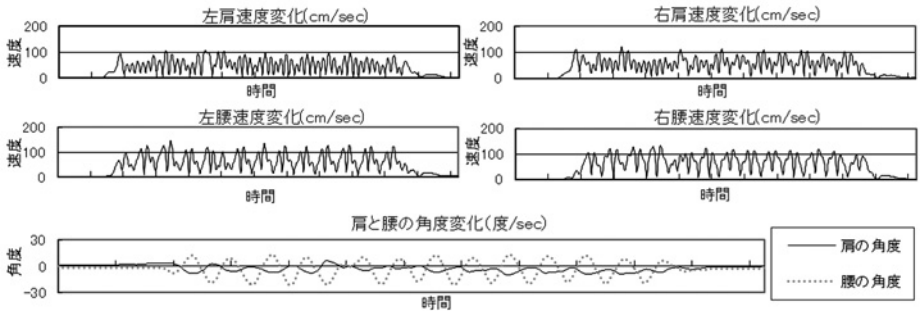
女性 C のゴンダ-b



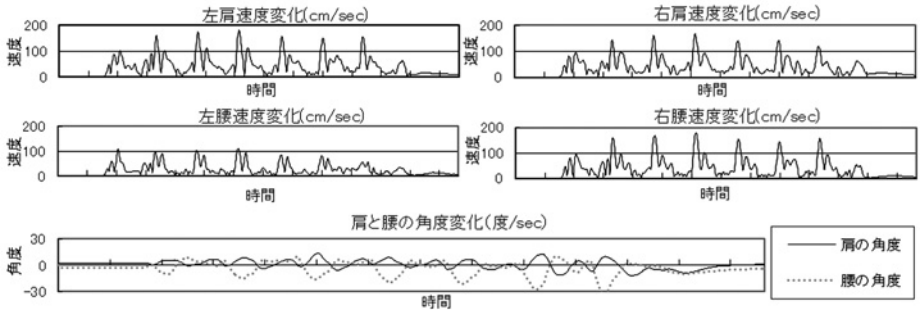
女性Ｃのサンブル-a



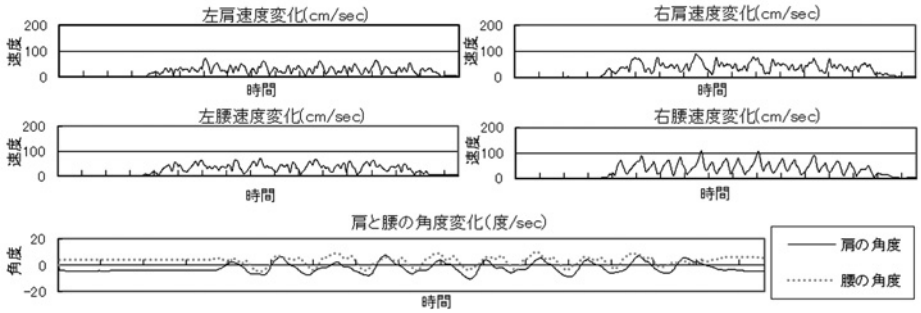
女性Ｃのサンブル-b



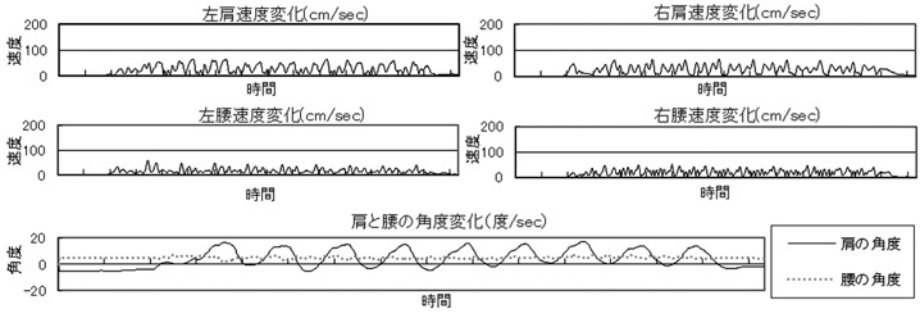
女性Ｃのボラナ-a



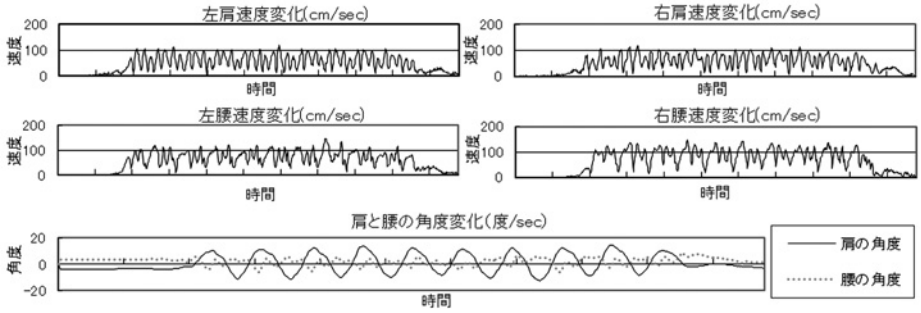
女性Ｃのボラナ-b



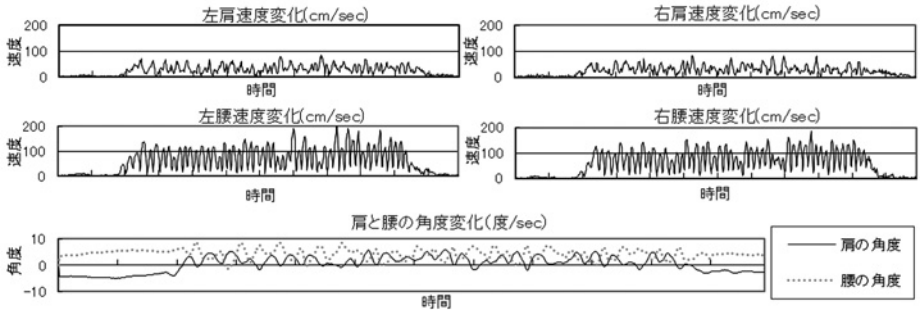
女性 D のキクユ-a



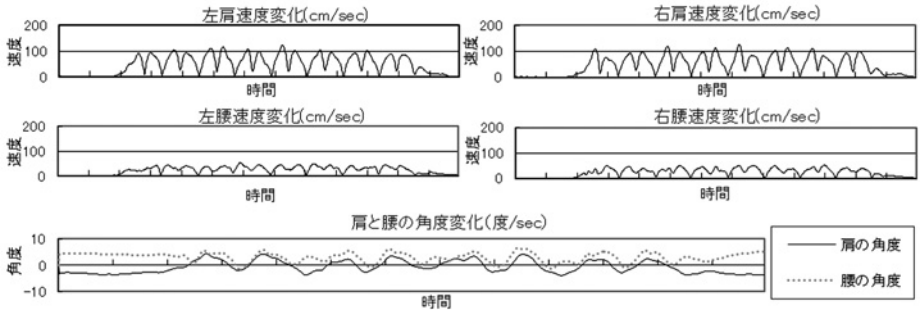
女性 D のキクユ-b



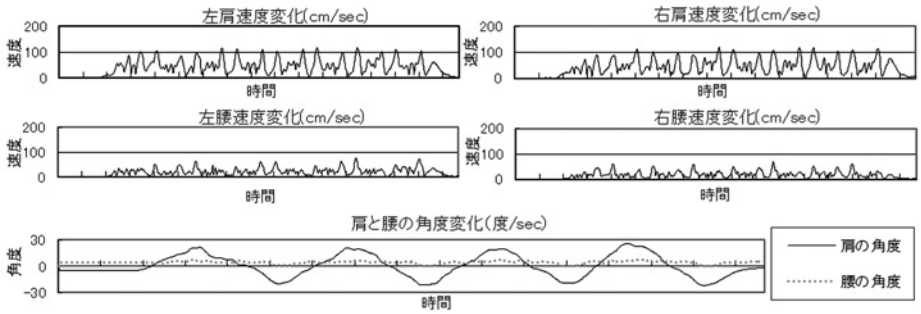
女性 D のゴンダ-a



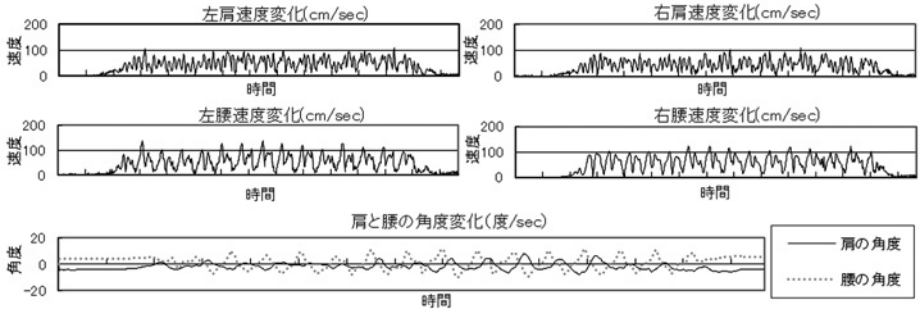
女性 D のゴンダ-b



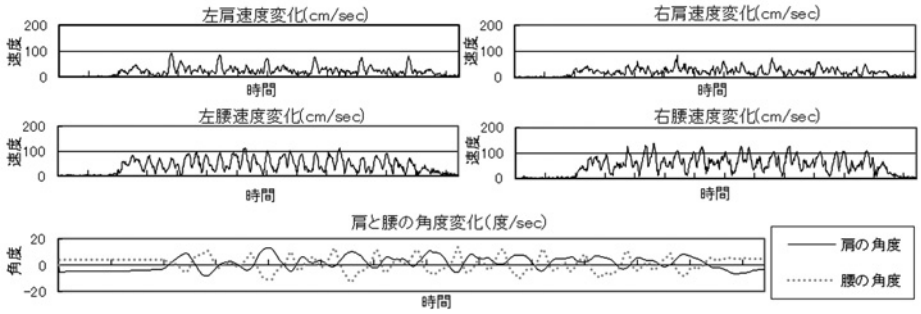
女性Ｄのサンプル-a



女性Ｄのサンプル-b



女性Ｄのボラナ-a



女性Ｄのボラナ-b